



「庄原市県立広島大学研究開発助成事業」報告会開催

庄原市県立広島大学研究開発助成事業は、本学の教員が有するシーズを活用した研究成果を商品化・事業化に結びつけ、新たな産業創出による地域活性化を図ることを目的に平成17年度より始まった事業です。主に地域資源を活用した農林振興や環境保全、福祉ビジネスの研究に助成されます。平成17年から平成24年まで27件が採択され、単年度300万円を上限に助成金の交付を受けています。庄原市の事業者と県立広島大学が共同で取り組んでいることから、その成果をいち早く事業化することができるのが強みです。

平成23年度に終了した案件に関する本年度の庄原市県立広島大学研究開発助成事業報告会は11月20日(火)に庄原市ふれあいセンターで開催されました。本報告会は平成18年度から毎年1回行われ、今回で7回目となります。当日は約100名の市民の皆さん、事業関係者、庄原市役所および本学関係者が熱心に耳を傾け、活発な質疑応答が行われ、盛況な会となりました。地域の商業施設を中心とした旧商圏の再活性化対策(代表 堀田学生命環境学部准教授)、エゴマを活用した商品の開発(代表 武藤徳男同学部教授)、ポリフェノール入りクッキーや食パンの開発(代表 吉野智之同学部准教授)、地域資源を活用した乳製品の生産(代表 有馬寿英同学部助教)、里山整備を通してのマツタケ再生(代表 相沢慎一同学部教授)の内容で、5名の教員が報告を行いました。なかには地元メディアからも注目される研究成果もありました。

本事業を通じてこれまでジャムやクッキー、豚、工作機器など多くの商品が生み出されており、今後もその成果が大きく期待されるところです。研究成果の社会への還元は大学の重要な責務です。本学は、このように自治体からの支援も得ながら、地域の活性化に寄与していきます。



武藤教授報告の様子



吉野准教授報告の様子

広島キャンパス

HIROSHIMA CAMPUS

地域連携

平成24年度地域戦略協働プロジェクト事業 〈江田島市〉

本年度より、江田島の観光振興を目的とした新たなプロジェクト「観光に係る意義と魅力発見」（担当：経営情報学部粟島浩二准教授）を開始しています。本プロジェクトは、観光業関係者向けのセミナーの開催や、本学学生による江田島の観光資源調査・発掘が計画されており、9月4日（火）から5日（水）にかけて、学生が観光資源調査や関係者へのインタビュー調査を実施しました。

初日は、「海上自衛隊第一術科学校」（旧海軍兵学校）や「ふるさと交流館」を巡り、観光協会事務局長へのインタビューを行った第1班と、砲台跡やIターンの方々で作られた施設「夢来来」を巡り、「田舎暮らしを楽しもう会」の方々へのインタビューを行った第2班に分かれ、島内の調査を行いました。2日目は、2班合同で検討会を開き、島内調査やインタビューの結果を議論しました。

今回の調査の結果は観光産業振興策としてまとめ、来年2月開催の報告会で提案する予定です。



旧海軍兵学校



砲台跡

産学連携

〈信用金庫合同ビジネスフェア〉

11月13日（火）に第7回信用金庫合同ビジネスフェアが広島グリーンアリーナで開催され、本学は産学連携や就職支援を目的に出展しました。フェア全体としては過去最大の参加者となり、本学ブースには計29件の来訪者がありました。自社の商品開発や新事業プランに関する相談や、2014年度以降の求人や就職支援サービスの紹介等が寄せられ、地域企業のニーズや要望を知るよい機会ともなりました。後日さらに詳しい相談を受け、そのうち1件については具体的な連携へと進展しました。



公開講座

「基本情報技術者試験対策講座」

9月に、10回にわたって「基本情報技術者試験対策講座」を開講しました。従来行ってきたITパスポート試験対策のステップアップ講座です。夜間の開講でしたが、「試験までの勉強でどこを集中的に取り組めばいいか浮き彫りになり、たいへん有意義だった。解き方のポイントもとてもわかりやすく説明してもらった」という感想が寄せられました。

「お子さま連れで学べる経営・ファイナンス基礎講座」

9月の土曜日、将来のキャリアアップに向けて勉強したい子育て中の人を対象に、乳幼児同伴で参加できる講座を実施しました。初めての試みでしたが、「子どもがいっしょでも受け入れてもらえて勉強できるなんて、夢のよう」、「育休中に勉強する機会がもててよかった」など、好評でした。

「バラの軌跡」

10月の土曜日、ひろしま美術館との連携公開講座を開講しました。同美術館で開催された2つの特別展に関連する講座で、植物遺伝子工学、文学、絵画の各方面からバラの魅力について考えました。

「読み切り文学講座」

10月から12月にかけて月に一度、広島市南区図書館との連携公開講座を開講しました。今回は「原作と脚色」をテーマに、『平家物語』と能、『水滸伝』と『八犬伝』、『アリス』と映画化について作品を読み解き、それぞれの魅力を探りました。

「心理学から見た人間の表と裏」

11月、廿日市市との連携公開講座を開講しました。子どもの成長・発達、知的能力、対人関係の分野で、具体例を挙げながら、人間の心の働きの肯定的な面と否定的な面について考えました。

「大人のための小さなコンサート」

11月の土曜日、広島キャンパス図書館でオカリナとピアノによるポピュラーソングのコンサートを開催しました。オカリナの澄んだ音色が図書館の吹き抜けに響きわたり、感動を呼びました。



研究紹介

就学前体育のカリキュラム開発に関する実践的研究

人間文化学部健康科学科 教授 中瀬古 哲

現在、子どもたちの戸外遊びの時間は平均20分以下とされています(30年前は2時間以上)。子どもの運動体験不足(=子ども時代の喪失)は、運動能力等の「行動体力」のみではなく自律神経系やホルモンバランス等「防衛体力」の低下も招いている可能性があることが指摘されています。それをうけ文部科学省は「幼児期運動指針」を策定しました(2012年3月)。そこでは毎日合計60分以上楽しく体を動かすという指針と28の基本的な動きの例が提示されました。保育園や幼稚園等では、この指針を踏まえて体育のカリキュラムを開発することが求められています。

現在、私は、就学前の体育のカリキュラム開発のための基礎的知見を得るために、県内8つの保育施設と連携し、就学前の体育実践の「計画-実践-反省」サイクルに関わるという共同実践研究を行っています。就学前の子どもたちに既存のトレーニングや無味乾燥な反復練習は通用しません。子どもたちの生活課題・発達課題をも含みこんだ学習課題を、総合的な「生活」「遊び」という形で提供せねばなりません。保育実践としての体育指導のあり方の探究といっても良いでしょう。最近では、“ボール遊び”と“予測判断能力の発達”との関係に焦点をあて研究をすすめています。



マルチチャンネルシステムにおける多元トラフィックの品質制御に関する研究

経営情報学部経営情報学科 教授 陳 春 祥

インターネットは、放送と通信を融合しつつ、超高速・大容量へ深化する一方、高機能スマートフォンやタブレット端末の普及により、音声や映像などのメディアから、インターネットへのトラフィックが加速的に増加しています。インターネットに対して高い通信品質を安定的に供給されるよう、災害時でも機能するように求められています。通信品質は伝送品質、接続品質と安定品質の3種類に分類されますが、具体的な評価指標としては、データの許容誤り率、データ転送の遅延時間、遅延時間の揺らぎなどがあります。本研究室では、近年情報ネットワークを取り巻く環境の変化(例えば、複数のチャンネルを同時、あるいは切り替えて利用できる機器の普及や、従来のデータ、音声及び映像などのメディアとは異なるビッグデータが爆発的に発生していることなど)に着目し、マルチチャンネルを有する通信システムにおける多元トラフィックの品質を満たすための通信方式の開発、システムの性能評価などに関する研究を行っています。また、ネットワーク・システムの構築・運営管理は、ネットワーク・システムそのものが最適になるだけでなく、企業経営戦略の一環としてTCO(Total Cost of Ownership: 総保有コスト)も最適になるように、システムの構築・運用管理及び品質制御に関する多面的な研究を行っています。

講演会「美術館と地域文化」

10月から11月にかけて、本学がキャンパスメンバーズ制度に加入している広島県立美術館の越智裕二郎館長、奥田元宋・小由女美術館の村上勇館長、ひろしま美術館の宇田誠館長による連携公開講演会を行いました。

それぞれの美術館の設立の経緯、地域で果たす役割、今後の課題などをお話いただき、参加者からは「美術館の存在が広島文化の発展に重要な役割を果たしていることを再認識した」、「歴史、文化、風土が地域活性化に大きく寄与しているという話が参考になった」、「美術館ごとにテーマや特色、役割があることを知り、美術館に対する興味が増した」、「美術館の役割は人々に心の安らぎや支えを与えることだ、という話が心に残った」、「感謝の心と美しいものに出会えるときめきを求めて、これからも美術館に出かけようと思う」などの感想が寄せられました。

本学は今後も地域の文化施設との連携を維持・発展させていきます。



庄原キャンパス

SHOBARA CAMPUS

学術講演会

「買うのはモノであり、コトなんです。」

12月4日に講師に鈴木正晴氏（株式会社コンタン代表取締役社長、日本百貨店ディレクター兼バイヤー、全国商工会連合会専門家）をお迎えして「平成24年度県立広島大学学術講演会」が、「買うのはモノであり、コトなんです。」をテーマに庄原キャンパス大講義室で開催され、51名が参加しました。

地域には優れた「モノ」や「コト」があるにもかかわらず、それを「お金」にすることが難しく、継承することさえ困難な状況にあります。鈴木氏は、それら良い「モノ」をお金にするための店を持つことを日本百貨店という形で実現されました。日本百貨店は単なる「店」ではなく、生産者と消費者を結ぶ「場」であり、「場」には「力」が宿ると語られました。また、商品の「売り方・見せ方」は買う人に対する思いやりが大切であることも示されました。

講演後には、地域資源の活かし方やものづくりについて、質疑応答がなされました。



公開講座

本学主催の「県北の農業振興と尾道松江線の開通」を35名の応募のもと本学庄原キャンパスで10月20日に開催しました。

平成25年度に尾道松江線が全線開通します。その開通は広島県北部の振興の鍵を握ると考えられ、道の駅も高野町に設けられる予定です。飛躍的に交流人口が伸びることが予測される一方で、県北の「素通り」も懸念されています。そこで今回の講座では尾道松江線開通の影響について知り、そのうえで尾道松江線の開通をどう活用するか、さらには県北の農業振興の貢献という観点から農産物、農産物加工品の販売をどのようにすべきか等の問題について考えました。

テ ー マ	講 師
尾道松江線開通をどう活用するか	生命環境学部 教授 藤田 泉
農産物をどう売るか ～九州の事例を中心に～	地域連携センター准教授 西川 洋行

講座では県内市場だけではなく、北東アジアをにらんだ戦略が必要なこと、鳥栖市のように、関係する自治体も含めて早急に取り組むこと、販売では九州の事例を紹介しながら、オンリーワンやグローバル（地域資源の優位性を維持発展させながら世界的に認知される拠点となること）の戦略の重要性が説明されました。受講生からも有益な講座であったと高い評価を受け、最終的に31名の方々が修了証書を手に入れました。

地域連携

中山間地域の旧商業地域の活性化と買い物弱者対策

生命環境学部生命科学科 准教授 堀田 学

庄原市は、専門店が昭和40年代に集積したショッピングセンターを中心とした旧商業エリアと量販店の進出が著しい国道沿いの新商業エリアに分断されています。まちづくりとも深く関連があるため、旧商業エリアの再活性は必須です。そこで住民がどのような購買行動を取っており、旧商業地域に改善を求めているかを探るために、庄原市全戸の1/10を対象としたアンケート調査を実施しました。その結果、商品の品揃えや販売価格といった買い物に直結した改善よりも、高齢者や乳幼児の憩いの場、文化施設の充実や診療所や病院の設置に対する要望が強いことがわかりました。すなわち商業地域に付随する機能の充実によって、人のにぎわう場となることが求められているのです。

この結果を受けて、現在、農村地域でのタブレット端末を活用したネットスーパーの充実に取り組んでいます。ネットスーパーは全国各地で林立していますが、都市近郊の中年層による利用が大半で、買い物弱者に寄与できていないのが実情です。現在、社会実験中ですが、実現可能な方法を見いだしたいと考えています。

庄原市教育委員会共催市民公開講座

庄原市教育委員会と共催で県立広島大学市民公開講座「実験から見る学問の最先端の世界」を11月7日、15日、28日の日程で開催しました。大学の設備を活用し、研究を行う大学という場を体感してもらうために3年前から実施している参加型の講座です。毎回好評で今回も定員20名を超える方からの応募があり、22名の方々が修了証書を手にされました。

回	講座名	講師
1	環境分析への誘い	生命環境学部 三苫 好治 准教授
2	生物の光を見てみる 利用する	生命環境学部 阪口 利文 准教授
3	不妊治療を目的とした 哺乳動物卵の体外培養	生命環境学部 山下 泰尚 准教授

実験を通して観察する研究の最先端の世界は受講生にとっても興味深いものであると同時に、実験を手伝う学生との交流も楽しいものでした。また今年度からは、本講座を10回以上修了した方に新たに「県立広島大学市民公開講座マイスター認定証書」を授与することになりました。最初にあたる今年度は10名の方に授与しました。



講座の一コマ

研究紹介

フグ科魚類の毒化機構の解明をめざして

生命環境学部環境科学科 助教 松本 拓也

本年10月に着任しました。私の専門分野は水産化学で、フグ科魚類の毒化機構の研究を行ってきました。

フグは日本の食文化を代表する食材の1つですが、強力な神経毒であるフグ毒テトロドトキシンを肝臓や卵巣に高濃度に蓄積しています。我が国では、食品衛生上の観点から法令によって人の健康を損なうおそれがないと認められる食用フグとその可食部が定められています。しかし、フグ取扱資格を持たない素人による有毒フグや有毒部位を誤食する中毒が毎年発生し、その死者数は年間食中毒死者数のおよそ半数を占めるため、食品衛生上極めて重大な問題です。

当研究室では、トラフグを実験モデルとして薬物動態学的手法を取り入れ、生きた状態のトラフグから経時的に採血できる実験系を構築し、フグの毒化機構を調べました。その結果、トラフグの筋肉や消化管内そして血管内に投与したフグ毒は、どの投与経路でも、血液循環系を介して30~60分間の短時間で肝臓に取り込まれて蓄積することが明らかとなり、トラフグの肝臓はフグ毒の主要な蓄積部位であることが裏付けられました。

今後は、トラフグ肝臓へのフグ毒の取り込みを担う分子メカニズムを解明することが課題で、これを制御できれば、毒素を持たない安全なフグの生産ができるかと期待できます。

地域連携

庄原市委託事業で開発したトマト加工品を「ワンデイシェフ」でPR

平成24年度「庄原市農産物特産加工品開発等実証業務委託事業」において、地産トマトの加工品作りを行っています。このたび、庄原まちなか広場の三軒茶屋において9月29日から10月13日までの週末の全4日間、「県大ワンデイシェフ」を開催しました。今後の商品化に向けて市民の皆さんの声を活かしたいとの思いから、開発した加工品である「トマトの食ベラー油」、「トマトソース」、「青トマトのコンフィチュール」等を用いた創作料理を提供しました。1日40食限定で延べ175人の方に試食いただき、113名の方にアンケートにご協力いただきました。その結果、8割の方から「加工品を是非購入したい」、「今後もこのような催しを続けてしてほしい」との要望をいただきました。今後、特産物となるトマト加工品を増やし、県大ブランドで地域の活性化に貢献できればと考えています。



三原キャンパス

MIHARA CAMPUS

学術大会

第25回 日本保健福祉学会学術集会



年齢を問わず、障害の有無や軽重を問わず、長寿活力社会の一員として活動できるようにするためには、いま何をすべきなのか、第25回日本保健福祉学会学術集会等において、この課題に取り組みました(10月27日三原キャンパスで開催)。

日本は医療保険・介護保険の整備などによって安定した保健福祉体制を築き、その他の先進国に比べても、非常にすぐれた長寿社会を築くことに成功してきました。しかし現在、国際的な経済危機や急速な少子高齢化という現実と直面し、その安定は重圧に変化しつつあるように見えます。後世に負債を残すことなく、持続可能な長寿活力社会を建設するために、いま何をすべきなのか、本学術集会ではこの課題に対する答えを得るために、「多世代共生による持続可能な長寿活力社会に貢献する保健福祉の役割」をテーマに設定しました。保健福祉に関心をお持ちの関係者の皆さま、市民の皆さま、学生の皆さま、多くの皆さまのご参加から、貴重な連携と協働を築けますことを念願しています。

第25回日本保健福祉学会学術集会会長
本学保健福祉学部長 今泉 敏

第9回 広島保健学学会学術集会・第13回広島保健福祉学会学術大会(合同学会)

県立広島大学保健福祉学部と広島大学大学院保健学研究科主催の合同学会が、9月30日(日)に広島大学の広仁会館で開催されました。県立広島大学からは、30名が参加しました。午前は、一般演題の口頭発表と特別講演「健康格差社会への処方箋—社会

環境への着目—」が行われました。午後からのシンポジウムでは、「多様化する社会の中で、人間の健康と幸福をどのように捉えプロモートするか?」と題して、4人のシンポジストの報告がありました。終日行われたポスターによる報告では、全19題(うち8題は本学提案)の発表が行われました。次回は、本学で開催予定です。

三原シティカレッジ

「おもしろぶつり実験」

8月20日、24日に、小学3～6年生を対象に夏休み特別企画を開講しました。今回は、「光について知ろう」(20日)と「放射線と元素のふしぎ」(24日)がテーマでした。20日は、ペットボトル・水・フローリングワックス・懐中電灯を用いて、夕日が見える仕組みを学ぶ実験など5種類を行いました。

「体の不自由なヒトのことを知ろう」

8月初旬、小学校高学年から高校生までを対象に開講しました。本学理学療法学科の教員の指導のもと、高齢者疑似体験用具を用いて体の不自由な人の動きを体験しました。また、車いすの操作方法では初めての体験にもかかわらず熱心に楽しく取り組みました。



「ものづくりと健康づくり」

8月から10月にかけて、計5回、本学作業療法学科の教員による講座を開催しました。木工・金工・陶芸・籐細工などから受講者の作成したいものを選択し、楽しみながら各々の作品を作りました。

「英語学習への誘い」

8月20日～24日に、英語の小説の冒頭や英語のニュース、日常生活での会話などをテーマに開催しました。さまざまな年齢層の方が参加し、積極的に学びました。



地域連携

「ノーバディーズ パーフェクト プログラム」の紹介

三原地域連携センターでは、平成23・24年度に、乳幼児期（おおむね3歳未満）の子どもをもつ親を対象とした親支援プログラムの一つである「ノーバディーズ・パーフェクト・プログラム（Nobody's Perfect Program:以下、NPプログラム）」を、「みらい子育てネット・みはら」と協働で開催しています（平成23年度は、財団法人ひろしまこども夢財団から、平成24年度は三原市から助成を受けて実施）。NPプログラムは、1980年代はじめにカナダ保健省と4州の保健部局によって開発され、やがてカナダ全土に導入された地域社会における親支援プログラムです。専門家や講師が参加者に育児等について直接指導するのではなく、参加者が相互に学び支え合う、参加者を中心とした体験学習スタイルをとります。

「NP講座」は、親同士が安心して出会い、自分たちの生活や子どもについて、そして親の役割について一緒に考える場です。今回の協働事業の「NP講座」では、参加者が抱えている悩みや関心のあることをグループで話し合い、自分に合った前向きな子育ての仕方を学んでいます。これを保障するために、グループ間の調整を行うNP認定ファシリテーターが重要となります。

また、参加者が安心して「NP講座」に集中できるよう、受講の間、子どもは別室で過ごします。本事業では、託児スタッフとして本学学生も参加しています。実際に、子どもから直接学ぶだけでなく、地域で子育て支援に従事しておられる託児スタッフから、子どもへのかかわり方や日常の活動を教わるなど、親支援の実践に触れる体験を通して子ども・家庭福祉分野への理解も深めています。



研究紹介

「いつまでもおいしく食べるコツ」の研究 ～誤嚥性肺炎の予防とリハビリテーション～

保健福祉学部コミュニケーション障害学科 教授 矢守 麻奈



どんな年齢の人でも様々な病気やけがによって、飲食する機能（嚥下機能）に障害を生じます。また歳を重ねるとやはり嚥下機能に変化を生じます。毎日の小さな変化が積み重なって、自分も周囲も気づかないうちに、深刻な事態を招いてしまうことがあります。高齢者に多い窒息事故や誤嚥性肺炎、低栄養も、転倒などと同じく、そんな「忍び寄る障害」の一つです。障害や年齢による変化の様子を研究することによって、より良いリハビリテーションや障害予防の方策が解り、その方・その年代にふさわしい対応がとれると考えます。時の流れを止めるアンチエイジングはできませんが、より快適な熟成（グッドエイジング）を迎えたいものです。

また、リハビリテーションは、当事者だけが頑張ればいいものではありません。当事者と周囲の環境が歩み寄ってこそ高い効果が得られます。障害のある方に関わる方は勿論、一般の方も、若くて健康なうちから飲食のしくみとその障害について知っていれば、大切な方やご自分が高齢になったり障害を生じたりした時にスムーズに適切な対応をとれます。昨今否定的報道の多い「胃ろう」も、問題なのは、胃ろう自体でなくその前後に適切な予防・治療・看護・介護・リハビリテーションが十分行われていないことでしょう。

現時点では、1) 飲食機能は60歳代から低下し始める、2) しかし一口量は高齢者ほど多くなる、3) 健康な時は男性の方が速く多く飲めるが、誤嚥性肺炎や窒息も男性の方が多い、4) 食物の形態や姿勢、食器、飲み方・食べ方によって誤嚥性肺炎や窒息を防止できる、5) 嚥下機能低下を防ぐ体操がある、等々が解明されています。さらに具体的に「いつまでもおいしく食べる・食べさせるコツ」にご興味のある方・施設はどしどしご連絡ください。出前講座に伺います。

ひろしま産業振興機構による庄原キャンパス研究室訪問

公益財団法人ひろしま産業振興機構が例年実施している大学研究室訪問が、本年度は本学庄原キャンパスにて第一回9月19日(水)、第二回10月26日(金)に開催されました。「環境浄化分野の技術力を次世代産業へ結びつける」をテーマに、生命環境学部環境科学科の合わせて4研究室を訪問しました。

日時	研究室	専門分野	発表テーマ	参加者数
9月19日(水)	三苦 好治 准教授	環境材料学, 環境分析化学	新しい環境浄化剤であるナノカルシウムの可能性	38名
	崎田 省吾 准教授	廃棄物処理・処分, リサイクル	都市ごみ焼却残渣の炭酸化処理による環境安全な有効利用	
10月26日(金)	原田 浩幸 教授	環境化学工学	バイオマス資源を活用した環境浄化剤の開発	23名
	西村 和之 教授	環境衛生工学	循環型社会の形成と衛生工学	

研究室訪問に当たっては、参加者はまず講義室にて訪問先の教員から研究内容についての説明と解説を聴き、それぞれの研究について理解を深めました。その後、研究装置や実験器具等が置かれている実験室を訪問し、実際の研究手順や装置の操作等について実演を交えた説明を受けました。

研究内容の説明・解説では、研究の背景や日常生活とどう関わるのかという話を交えながら、自分の研究がどのように世の中と関わり、役立っているかについての説明があり、大学での研究と実社会との接点を理解すると共に、参加者自身の仕事や生活への関連について質問が出る一幕もありました。

後半の研究室訪問の際には、実際に研究で使われている機器や装置を直接見学でき、参加者からは多くの質問が飛び交っていました。実験手順をその場で再現して化学反応が進む様子を实演したり、研究室の学生による化学分析のデモンストレーションを行ったりと、それぞれの研究室で工夫をこらした説明がなされました。ふだん目にする事のない研究の現場に接し、刺激を受けた参加者から「大変参考になった、有意義であった」、「もっと詳しく内容を知りたい」といったご意見をいただいています。



研究内容の説明・解説



研究室で装置の説明を受ける

編集後記

センター報第16号をお届けします。本号では、庄原市県立広島大学研究開発事業報告会をはじめ、ひろしま産業振興機構による庄原キャンパス研究室訪問、学術講演会、公開講座、研究紹介、地域連携等に関する記事を掲載しております。次号以降では、広島、三原キャンパスでの取り組みにも焦点をあててご紹介したいと思います。皆様にはこれらの記事を是非ご一読いただき、地域に根ざした本学の取り組みに、引き続き、ご支援・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。(K)

編集発行

県立広島大学地域連携センター

〒734-8558 広島県広島市南区宇品東一丁目1番71号
電話(082)251-9534/E-mail:renkei@pu-hiroshima.ac.jp

各キャンパス問合せ先

県立広島大学庄原地域連携センター [本号編集担当]

〒727-0023 広島県庄原市七塚町562番地
電話(0824)74-1704/E-mail:gakujutu@pu-hiroshima.ac.jp

県立広島大学三原地域連携センター

〒723-0053 広島県三原市学園町1番1号
電話(0848)60-1200/E-mail:mrenkei@pu-hiroshima.ac.jp